

学道一如

発行 高校
小樽双葉通信
生徒会 6月29日
2023年 第17号

特集▼小樽再発見(2) 駒木定正氏

これからの百年を見据えて 歴史的建造物を活かすまちづくり

第2回は小樽運河保存運動で歴史的建造物の価値を学問的な立場からリードしている駒木定正氏にお話をうかがった。



駒木定正氏(工学博士、一級建築士、北海道職業能力開発大学校 特別顧問、72歳)、左写真の北海製罐小樽工場第三倉庫活用ミーティング座長を務める。

小樽再発見 (2)



▼小樽運河や歴史的建造物の保存運動に関わるようになったいきさつを教えてください。
出身は釧路ですが、近畿大学(大阪)で建築工学を学び、そこで神社仏閣などの歴史的建造物の歴史を学びました。1977年に美唄工業高校に赴任し、建築を教える傍ら、小樽にある古い建造物に関心を持ち、よく訪れていました。その頃、小樽運河保存運動が高まっており、同世代の若者たちに共鳴し、運動に加わっていきました。1978年のポर्टフェスティバルの成功は運河保存運動を軌道に乗せたと思いますね。
その後、1983年には念願の小樽工業高校に赴任することになりました。
※「ポर्टフェスティバル」1978年、運河保存をアピールするため、山口保さん、小川原格さん、佐々木興次郎さんから20、30代の若者たち

によって企画されたイベント。約8万人が集い、運河と歴史的建造物の価値が認識された。

▼先生は、小樽に移られてから40年にわたり、運河や歴史的建造物の保存運動に関わってこられたのですか。
最初に関心を持ったのは、旧日銀小樽支店の建物です。また、その周囲の建物も建築物として一流ですが、これまできちんと研究されてこなかったのです。ちょうど、私に関心を持ち始めた頃は、建築学において明治以降の近代の建築物が研究対象となり、また、それを単体としてではなく、群として残していく流れになっていったのです。



旧日銀小樽支店

【ある卒業生のことば】

あるとき、工業高校の卒業生が訪ねてきて、「先生、まだそんなこと教えているの」という言葉にはっとさせられたのです。時代と共に研究や技術も進んでいますからね。その言葉に気づかされ、毎年、一本、学会で研究論文を発表することにしました。

た。美唄は炭鉱の街でしたから、三井、三菱の炭鉱と集落の建築の研究をしました。小樽では公会堂について調べていくと、明治時代の宮内庁との結びつきがあることがわかりました。



小樽市公会堂

「炭鉄港」という言葉を知っていますか。近代北海道を築く基となった三都(空知、室蘭、小樽)を石炭、鉄鋼、港湾、鉄道というテーマで結ぶことにより、人と知識の新たな動きを作り出そうとする

取り組みです。

▼これはまさに先生の研究対象とも重なっておられますね。先生の博士論文について、お聞かせください。
【炭鉱と鉄道の建築を研究】

1999年の博士論文は「明治前期の官営幌内炭鉱と幌内鉄道の建築に関する歴史的研究」でした。美唄で炭鉱にまつわる建築について研究していましたし、石炭が輸送されていた小樽では北海道初の鉄道、幌内鉄道(手宮線)の建築について調査しました。明治、大正時代のその分野の研究者はいなかったのです。道立図書館の台帳を元に調べました。

【双葉高校も歴史の中に】

札幌駅の始まりも知ることができたし、小樽双葉高校の建物の前身もわかります。鉄道建設の指揮をとったクロフォードらの宿舎として建てられ、郡役所、警察署、双葉高校となりました。

【保存運動は包括的】

最初は日銀小樽支店を研究しようと思いましたが、当時、まだ銀行は営業していたので、「それはやめてほしい」と言われ、一時研究を凍結してしましました。日銀本店から支店に建築技術がどう伝えられてきたのか、興味深いものがありました。その後、日銀が小樽支店を閉店したので、私の研究も生かされ、資料館でご覧になれます。

歴史的建造物の保存運動は、建築物のみならず、物作り、経済、文化、芸術、暮らしのすべてにかかわっています。6月24日、室蘭工業大学で研究発表をしますが、松田ビルのお話をします。玄関のデザイン、照明器具はアール・デコ調(パリで始まったデザイン)です。
※松田ビル(旧三井ビル) 左写真昭和12年、鉄筋コンクリ5階建て、1階部分が黒ミカゲ石、2階以上は淡色のタイルというシンプルでモダンな堂々たる威容をもつ。



1階部分が黒ミカゲ石、2階以上は淡色のタイルというシンプルでモダンな堂々たる威容をもつ。

1983年から市民を対象に歴史的建造物の公開講座を開いてきました。来月も予定されています。先週は札幌で開催しました。釧路でも毎年、秋に行っています。

【小樽案内人】

観光協会が「小樽案内人」の資格制度を設け、小学生から大人まで受講し、運河や建築物の案内をしています。小学生に小樽の街のことを教える授業が年間50時間あり、資格を持つ人が子どもたちを運河などに連れて行って教えています。子どもたちが街のことを知り、誇りに思えたらうれしいですね。

▼1986年に運河は半分埋め立てられ、整備されたと聞いております。全面保存できた方がよかったですでしょうか。

もちろんそうですが、半分残って、観光も盛んになっていますから、保存運動の成果です。運河を残したおかげだと思います。

▼小樽の観光は歴史的建造物が大きい活かされていると思います。ですが、具体例を挙げてください。

保存運動があつて、それから再利用の働きかけが生まれます。北一硝子の石造倉庫の例や、ニトリが旧拓殖銀行を美術館にしたのが良い例でしょう。再利用の働きかけはゲリラ的です。たとえば、越中屋ホテルを取り壊すことになった。その建物がなぜ大切なのか、陳情書を出しました。今は再びホテルとして再

利用されていますが、空き家のときに、それが大切であること示すことが大事なんです。

※越中屋ホテル 昭和6年、鉄筋コンクリ4階建て、ビル全面の凝ったデザイン、内部のアーチ調のステンドグラスが有名である。



越中屋ホテル

【調査で指定建造物絞り込み】

1992年に小樽の歴史的建造物の一斉調査をしました。1000万円の予算で、台帳を作り、2000棟の建物を調べました。一軒、一軒、画板とカメラを持ってね。それを4分の1の500棟に、さらに100棟に絞り込み、市の歴史的建造物に指定しました。それを『小樽の建築探訪』（小樽再生フォーラム・北海道新聞社 発行）として出版し、好評を博しました。

市民に建物の紹介を書いてもらったこともよかったですよね。この取り組みは道内の他の地域にも広がりました。

▼先生がお住まいになっているご自宅も歴史のある洋館ですね。30年前にマンション建築のために取り壊すというので、この

場所に解体して移築したものです。また、藪半というお蕎麦屋さんがありますが、そこが火事になって建て直すときも、再生を試みました。実際にリノベーションをして、見てもらい、その良さに気づいてもらおう。だったら、自分たちでやってしまおう、というわけです。

祝津に茨木家中出張番屋があるのですが、それも取り壊すというので、傷んでいても再生すれば活かせることを示すと、「やはり残した方がいい」と地元の方たちが考え、今では地域の財産になりました。

▼「第三倉庫活用ミーティング」の座長をお務めだと聞いております。どんな活動をなさってきたのでしょうか。

約一年弱、毎週集まっています。北海製罐小樽工場第三倉庫（左写真）は缶を収納する無機質な空間ですが、どう使い勝手を良くするかが課題です。大正時代に作られたものですが、当時の最先端の合理的なデザインが見られ、缶の運搬のためにスパイラルシュートが備わっています。中に階段はなく、エレベーターは無く、エレベーターは一段、缶をストックするだけなので、運河側に階段があります。



パリのポンピドー美術館と同じ発想ですが、それ

よりも先に建築されているのです。これも、保存運動があつたから「残しましょう」ということになったわけです。この建築物の活用方法については、これからじっくり用途を考えることになりました。市民全体の財産になるように、たとえば、子育て世代の交流場所など、市民から様々な意見が上がっています。

▼小樽が文化庁の日本遺産北海道の『心臓』と呼ばれたまち・小樽「民の力」で創られ蘇った北の商都の候補地域に認定され、本認定を目指しているのですが、その可能性はどうでしょうか。認定されると、どんなメリットがありますか。

地道にやっているから、そこを評価してほしいと思いますね。ここ数年はまちづくりの運動はあまりやっていなかったんです。観光客が沢山来るようになって安心していただけるようになってきました。でもこれではだめだと、市民が関心を持ち、役所も動かないといけないと思います。東京オリンピックのときに、1000の街を日本遺産に認定することになり、今の市長が教育部長だったときに「やりましょう」となった。この認定を受けるには街の展望を作る必要があります。それで歴史文化基本構想を3年かけて作ったんです。それでようやく申請できるようになり、今、候

補地域の段階です。条件としては、重要文化財があること（手宮機関車庫、日本郵船小樽支店、三井銀行小樽支店）です。市は「炭鉄港」（空知・室蘭・小樽）の取り組みにエネルギーをとられていたので、一年で申請書を作成しました。本認定に向けて作業や事業を進めています。

▼歴史的建造物の保存方法について教えてください。

建物それぞれの状態によりますが、法隆寺は木造ですが1300年保たれています。実は鉄筋コンクリートの寿命はまだわからない、文化庁も研究中ですが、筋道をつけて解決する方法を残さないといけない。銀行などの建物をいざれどうしたらいいのか、国の制度を入れながら残す道を探る。「歴史まちづくり法」（地域における歴史的風致の維持および向上に関する法律、H20年制定）により、まちづくりの見通しが持てると思います。また、建造物を単体としてではなく、エリアとして確保していくことが大切です。

鉄筋コンクリートの寿命は小樽の歴史的建造物の課題でもあります。基本的には、鉄筋が錆びて、ボロボロになっていないことが大事です。その点、北海製罐小樽工場第三倉庫の骨組みは大概大丈夫なようですが、詳細調査と整備・活用計画が進められています。